豊崎由美「読んでいいともカイブンの輪」第36回
年末スペシャル「オレたちガイブンリーガーの自信の１球と来年の隠し球」vol.3
2014年12月21日@リブロ池袋本店

【河出書房新社】
★今年のイチオシ
閻連科『愉楽』(谷川毅訳)
飛ぶように走る片脚の青年、下半身不随の刺繍の名手、微かな音を聞き分けるめくらの少女。レーニンの遺体を購入して記念館を建設するために結成された、障害者ばかりの絶技団。現代中国の矛盾を撃つ、笑いと涙の物語。

トム・ジョーンズ『コールド・スナップ』(舞城王太郎訳)
暴力・病・性・死。崖っぷちギリギリの状況に追い詰められた人間たちの傷つけられた魂を、疾走感溢れる「声」で深く抉りだす短編集。岸本佐知子訳『拳闘士の休息』に続くトム・ジョーンズ第二作品集にして舞城王太郎による初翻訳書。

★来年の隠し球（一部仮題）
ウラジーミル・ソローキン『氷――氷三部作２』(松下隆志訳) １月
氷のハンマーで覚醒する「真の名」をもつ仲間たち。現代ロシアの死と再生を目論むカルト教団を描いた氷３部作の第１作。続篇『プロの道』『23000』も続刊

ミュリエル・スパーク『寝ても覚めても夢』(木村政則訳) １月
湊かなえ、藤野可織、山崎まどかも絶賛の英国ブラックユーモアの女王、本邦初訳の長篇。富も名声も美しい妻も手に入れた映画監督の悪夢……それは、ブサイクな次女の失踪だった！

パトリック・シャモワゾー　『素晴らしきソリボ』(関口涼子／パトリック・オノレ訳) １月
カーニヴァルの夜、語り部ソリボは「言葉に喉を掻き裂かれて」死ぬ。クンデラに、「ボッカッチョやラブレーにつづく」と激賞された、クレオール文学の旗手の画期的小説。

ミラン・クンデラ『無意味の祝祭』(西永良成訳) ３月
１０年ぶりの新作小説にして、本人いわく「最後の小説」。２０世紀から２１世紀の歴史・政治・社会風俗を徹底的に笑いのめし、「無意味は人生の本質」と言い切る傑作。

アントニオ・タブッキ『イザベルに』(和田忠彦訳) ３月
20世紀後半サラザール政権下のポルトガルを舞台に、謎の女イザベルを追う９つの物語。タブッキが愛したポルトガルの風物を織り込みつつ、あり得べき事実と記憶の狭間で揺らぐ人間を描く。

ジョン・スラデック『ロデリック』(柳下毅一郎訳) 2015年春
捨てられてしまった自己学習型ロボットの受難と成長を描く、スラップスティックでピカレスクなロボット・オペラ！　動かなくなってしまったＡＩＢＯたちの魂に誓って、今度は本当に出ます。

ディーノ・ブッツァーティ『モレル谷の奇跡』(中山エツコ訳) ４月
ブッツァーティの遺作となった画文集。カラー。「聖女リータが行なった奇跡に感謝して奉納された奉納画」と称して作られた、このうえなくシュールでナンセンスな世界！

マイクル・コーニイ『ブロントメク！』（河出文庫）（遠山峻征訳）５月
『ハローサマー、グッドバイ』のコーニイ最高傑作と名高き名著、ついに復刊。

岸本佐知子編訳『コドモノセカイ』５月
子供にまつわる、誰も読んだことのないような、暗くて奇妙で心に迫る短篇を集めたオリジナル・アンソロジー。雑誌「文藝」で好評連載中。

デイヴィッド・ミッチェル『ヤコブ・デズートの千の秋（上・下）』（土屋政雄訳）６月
江戸時代の長崎出島。邪教の尼寺に拉致された美女の運命はいかに。『クラウド・アトラス』の著者による、ピンチョン×山田風太郎の空想歴史大ロマン

イーユン・リー『孤独よりも優しく』（篠森ゆりこ訳）７月
１９８９年、天安門事件直後の北京と、２０１０年の北京とアメリカを舞台に、毒を盛られた一人の女子大生の謎をめぐって、それぞれに孤独をかかえた若者たちの姿と、背景となる中国の闇を描く。

アンナ・スタロビネツ『むずかしい年ごろ』（沼野恭子訳）７月
シャーリー・ジャクスンを彷彿させる静謐な筆致と残酷さで、ロシアでは特異なホラー作家として各賞総嘗め、大注目新鋭の初邦訳短編集。双子をもつシングルマザーを襲う悪夢を、不気味な日記形式で綴る表題作ほか全８篇。

ミハイル・エリザーロフ『図書館司書』（北川和美訳）７月
失われた奇書をめぐり図書館で戦争が始まる。現代ロシアが生んだ破壊的スプラッターノヴェル。ロシア・ブッカー賞受賞

ホルヘ・ボルピ『クリングゾールをさがして』（安藤哲行訳）７月
ハイゼンベルク、ゲーデル、プーランクら、ノーベル賞級科学者とヒトラーの謎の顧問をめぐる物語。ボラーニョ以後のラテンアメリカ文学の旗手、ついに邦訳なる

ドナ・タート『ゴールドフィンチ（上・下）』（岡真知子訳）８月
ある日美術館爆破テロで母を亡くした少年が、一枚の絵画をめぐり波瀾に満ちた運命をたどる成長物語。ドナ・タート11年ぶりの超大作。ピューリツァー賞受賞。

ハンス・ヴェルナー・リヒター『廃墟のドイツ1947 グルッペ47の文学者たち』（飯吉光夫訳）８月
ギュンター・グラス、パウル・ツェラン、エンツェンスベルガー、ハンリヒ・ベルらドイツの世界的作家を多数輩出した「グルッペ47」をその中心人物が綴る。

ゼイディー・スミス『美しさ』（堀江里美訳）８月
人を愛し、信頼し、裏切られ、傷を負う。『ホワイト・ティース』の著者による「21世紀版ハワーズ・エンド」。オレンジ賞受賞

メヒティルト・ボルマン『希望のかたわれ』（赤坂桃子訳）８月
チェルノブイリ原発の立入禁止区域で暮らす老母。ドイツに留学し行方不明になったその娘を探す、キエフ警察の警部レオニード。戦争や原発の暗い記憶を抱えて生きる人々を描く文芸ミステリ。

カレン・ラッセル『レモン林の吸血鬼』（松田青子訳） 9月
話題沸騰『狼少女たちの聖ルーシー寮』に続く、第二短編集。黄昏の熟年吸血鬼夫婦、馬に輪廻転生する歴代大統領、蚕の身体になって製糸工場で働く少女たち……ますます奇想に富んだ全８篇を収録。

フランツ=オリヴィエ・ジスベール『１０５歳の料理人、愛と殺しの人生』（仮題）（北代美和子訳） 9月
押し寄せる歴史の荒波を「愛と笑いと復讐の力」で乗り越え、ナチスの料理人として「殺戮の２０世紀」を渡りきった１０５歳のローズが語る、ピカレスクな女一代記。

ジョイス・キャロル・オーツ『邪眼』（栩木玲子訳） 9月
30歳年上の芸術家と妻が暮らす豪邸を訪れる最初の妻とその娘。最初の妻には片眼がなく、夫の本性が次第に明らかになる。表題作の他「処刑」「すぐそばに、いつでも、いつまでも」など４篇を収録。

レナ・ダナム『ありがちな女子じゃない（仮）』（山崎まどか訳） 2015年秋
ニューヨークに生きるイマドキ20代女子の、痛くて切ないリアルすぎる生態を描き、世界中で話題沸騰のＴＶドラマ『GIRLS/ガールズ』（日本でもCS放送中）。ずば抜けた才能とセンスで脚本・監督・主演をつとめたレナ・ダナムによる、全米ベストセラー・エッセイ！

ウラジーミル・ソローキン『ブロの道――氷三部作１』（松下隆志訳） １０月
ツングース隕石探検隊に参加した青年が巨大な氷を発見し、みずからの真の名と「原初の光」による想像の秘密を理解する。最初の指導者ブロをめぐるはじまりの物語。

マリオ・バルガス=リョサ『つつましい英雄』（田村さと子訳） １０月
「決して踏みにじられたままで生きるな！」マフィアの恐喝に屈せずに生きた実在の人物をテーマに描く。ノーベル賞受賞第一作にしてリョサ最後の長編と言われる話題作。

ジョージ・ソーンダース『十二月の十日』（岸本佐知子訳） １２月
負け犬たちの奇妙で優しい日々。『短くて恐ろしいフィルの時代』が好評を博した現代アメリカ最重要作家の最新短篇集

「池澤夏樹＝個人編集　日本文学全集」全３０巻　刊行中
古典の新訳として、また「世界文学」を構成する文学作品として、「古事記」（池澤夏樹訳）、「百人一首」（小池昌代訳）、「竹取物語」（森見登美彦訳）、「伊勢物語」（川上弘美訳）、「堤中納言物語」（中島京子訳）、「土佐日記」（堀江敏幸訳）、「更級日記」（江國香織訳）、「源氏物語」（角田光代訳）、「枕草子」（酒井順子訳）、「方丈記」（高橋源一郎訳）、「徒然草」（内田樹訳）、「宇治拾遺物語」（町田康訳）、「発心集」（伊藤比呂美訳）、「日本霊異記」（伊藤比呂美訳）、「平家物語」（古川日出男訳）、「能・狂言」（岡田利規訳）、「説教節」（伊藤比呂美訳）、「曾根崎心中」（いとうせいこう訳）、「女殺油地獄」（桜庭一樹訳）、「仮名手本忠臣蔵」（松井今朝子訳）、「菅原伝授手習鑑」（三浦しをん訳）、「義経千本桜」（いしいしんじ訳）、「好色一代男」（島田雅彦訳）、「雨月物語」（円城塔訳）、「通言総籬」（いとうせいこう訳）、「春色梅児誉美」（島本理生訳）、「おくのほそ道」（松浦寿輝訳）、「たけくらべ」（川上未映子訳）を収録。
ちなみに来年の新釈は以下の通り。
2月　樋口一葉「たけくらべ」川上未映子 訳
7月「百人一首」小池昌代 訳
9月「宇治拾遺物語」町田康 訳
　　「発心集・日本霊異記」伊藤比呂美 訳
10月「好色一代男」島田雅彦 訳

「雨月物語」円城塔 訳
「通言総籬」いとうせいこう 訳
「春色梅児誉美」島本理生 訳

【国書刊行会】　タイトルはすべて仮題
★今年のイチオシ
ハンス・ヘニー・ヤーン『岸辺なき流れ（上・下）』
サミュエル・R・ディレイニー『ドリフトグラス』

★来年の隠し球
『国家はなぜ戦争へと向かうのか（Ⅰ・Ⅱ）』ジョン・ステシンジャー
『動きの悪魔』ステファン・グラビンスキー
『古い直線路』アルフレッド・ワトキンス
『棗と柘榴』尉天聰
『ヴァーノン・リー幻想作品集』中野善夫訳
『質屋のヘイガー』ファーガス・ヒューム
『死に行くもののあいさつ』ダニラ・コマストリ＝モンタナーリ
『マルセル・シュオッブ全集』大濱甫・多田智満子・宮下志朗・千葉文夫ほか訳
『自殺の歴史』ロミ
『サマーブロンド』エイドリアン・トミネ
『ジョン・ウォーターズの地獄のヒッチハイク旅行』柳下毅一郎訳
『ハリー・ニルソン伝記』アリン・シップトン／奥田祐士訳
『ルビッチ・タッチ』ハーマン・G・ワインバーグ／宮本高晴訳

●《ウィリアム・トレヴァー・コレクション》
『異国の出来事』（短篇集）　栩木伸明訳
『Love and Summer』（長篇・2010）　谷垣暁美訳
『The Children of Dynmouth』（長篇・1976）　宮脇孝雄訳
『Two Lives』（中篇２篇・1992）栩木伸明訳

●ジャック・ヴァンス・トレジャリー（全３巻）
『宇宙探偵マグナス・リドルフ』酒井昭伸訳
『切れ者キューゲルの冒険』中村融訳
『スペース・オペラ（＋短篇）』白石朗、浅倉久志訳

【白水社】
★今年のイチオシ
＜エクス・リブリス＞
2014年８月刊　パトリク・オウジェドニーク／阿部賢一・篠原琢訳『エウロペアナ』（チェコ）
現代チェコ文学を牽引する作家が、巧みなシャッフルとコラージュによって「ヨーロッパの20世紀」を大胆に記述。国内外で反響を呼び、20以上の言語に翻訳された、斬新な歴史-小説。各紙誌の書評でも大絶賛！

★来年の隠し球（すべて仮題）
白水社創業100周年記念出版
＜ボラーニョ・コレクション＞
3月　野谷文昭訳『アメリカ大陸のナチス文学』
極右の人種主義者、狂信的なファシストたちの奇妙な文学的営為。存在しない文学の存在しない作者たちの人生と作品に捧げられた、おぞましくもどこか切なく滑稽な「悪党列伝」。初期を代表する傑作
解説：円城塔

9月　斎藤文子訳『はるかな星』
アジェンデ政権下のチリで、第二次世界大戦の戦闘機に乗り空に文字を書いた、複数の名をもつ詩人にして殺人鬼……『アメリカ大陸のナチス文学』最終章から飛び出した主人公をめぐる戦慄の物語
解説：鴻巣友季子

＜エクス・リブリス＞
2月　ハリ・クンズル／木原善彦訳『民のいない神』（イギリス）
自閉症の4歳の息子が、米西海岸のモハベ砂漠にある、3本の岩の柱が立つ「ピナクルズ」で行方不明になった!?　UFO信仰、カルト宗教から金融業界まで、同じ場所で違う時代に起きるさまざまな事件が重層的に語られる。各章が徐々に加速して絡み合い、予測不能の展開に引きこむ、インド系英国人作家による傑作長篇

4月　呉明益／天野健太郎訳『歩道橋の魔術師』（台湾）
歩道橋の上に現われる「魔術師」が、仕掛けのない本当の「魔術」で子供たちに不思議な出来事を体験させる表題作など10篇を収録。「昭和」を思い出させる台湾らしい生活感と、懐かしさが漂う描写が秀逸。台湾文学を牽引する、今もっとも旬な若手による連作短篇集

6月　甘耀明／白水紀子訳『終点のない列車』（台湾）
大長篇『鬼殺し』で台湾文学界を震撼させ、主要文学賞を独占、「千の顔を持つ」と称される気鋭による歴史・家族・故郷をテーマとしたオリジナル編集による短篇集。政治犯だった祖父が乗ったという「神秘列車」を探して旅に出る少年を通して、国民党によるテロで離ればなれになった祖父母を描いた物語など全5篇を収録

8月　ラモーナ・オースベル／小林久美子訳『生まれるためのガイドブック』（アメリカ）
「誕生」「妊娠」「受胎」「愛」の4部に分かれた全10篇を収録。登場人物たちが身に宿すのは、障がい児、レイプによる妊娠、タンス!?　といった思いもかけない「他者」を孕む。プッシュカート賞、フランク・オコナー賞候補にもなった、米サンタフェ出身の新人による、チャーミングでガーリーな雰囲気にあふれた異色短篇集

10月　キルメン・ウリベ／金子奈美訳『世界を動かすもの』（バスク）
処女小説『ビルバオ-ニューヨーク-ビルバオ』で高い評価を得たバスク語の書き手による最新作。第二次世界大戦下、ベルギーに疎開したバスク人の少女と、正義と愛を求めて闘ったベルギー人作家の人生を軸に、愛する人の喪失とその克服、戦争によって失われた記憶を探し求める傑作長篇

12月　マヌエル・ゴンザレス／藤井光訳『ミニチュアの妻』（アメリカ）
ゾンビ、SF、ホラー、狼男、文化人類学、難病の音楽家、ハイジャック、架空の伝記など、ひねりのきいたサイケデリックな奇想を詰め込んだ第一短篇集。ある不注意から妻をマグカップ大に小型化し

てしまった主人公の悲喜劇を描いた表題作をはじめ、「21 世紀のミルハウザー」とも称される新星による快作

＜エクス・リブリス・クラシックス＞
5月　イーヴリン・ウォー／高儀進訳『スクープ』
英国文学の巨匠の初期作品（1938）。エチオピア戦争を記者として取材した経験をもとに、アフリカの架空の国の政変と報道合戦の狂奔を描いたコミック・ノヴェル。「英語で書かれた20世紀の小説ベスト100」に選出され、バリー・ユアグローも賞賛する隠れた名作。本邦初訳

＜白水Uブックス（海外小説）　永遠の本棚＞
1月　イーヴリン・ウォー／吉田健一訳『ピンフォールドの試練』
3月　アルフレート・クビーン／吉村博次・土肥美夫訳『裏面』
4月　サキ／和爾桃子訳『クローヴィス物語（新訳）
5月　ホレス・マッコイ／常盤新平訳『彼らは廃馬を撃つ』
7月　レオ・ペルッツ／前川道介訳『第三の魔弾』

【早川書房】
★今年のイチオシ
カーレド・ホッセイニ、佐々田雅子訳『そして山々はこだました（上下）』
固い絆を持つ幼い兄妹は、貧しさのため離れ離れになってしまう。激動する時代に翻弄されながらも、兄は妹のことを思いつづけるが……ベストセラー『君のためなら千回でも』の作家が送る傑作長篇。

デイヴ・エガーズ、吉田恭子訳『ザ・サークル』
世界最高のインターネット・カンパニー、サークル。同社に転職したメイは楽しく働きはじめるが、ソーシャルメディアでの交流が次第に私生活にものしかかってくるようになる。怖くて笑える長篇小説。

★来年の隠し球　メインの２球
ウラジミール・ナボコフ『アーダ』若島正訳！
カール・オーヴェ・クナウスゴール『我が闘争（仮）１』岡本健志訳

＊
M・L・ステッドマン『海を照らす光』古屋美登里訳　１月刊
灯台守の夫婦が暮らす孤島に、ある日赤ん坊を載せたボートが漂着する。夫婦は子供を実子と偽って育てはじめるが……。

ピーター・ヘラー『Dog Stars（犬の星）』堀川志野舞訳　３月刊
熱病によって人類のほとんどは死んだ。飛行機乗りのヒッグは愛犬と変な隣人だけを友として生きていたが、ある日無線から聞こえてきた声に惹かれて飛び立つ。

カズオ・イシグロ『The Buried Giant（埋まった巨人）』土屋政雄訳　４月刊
失われた記憶、愛、復讐、戦争……イシグロの新境地。

リチャード・ハウス『The Kills 四部作』武藤陽生・濱野大道訳　４月から連続刊行
ブッカー賞ノミネート。異色の国際謀略スリラー。

ジェシー・バートン『The Miniaturist（ミニチュアリスト）』青木純子訳　５月刊
十七世紀オランダ。孤独な新妻ネラのもとに、精巧なドールハウスが届く。そしてミニチュアの人形たちは、ネラや家族の運命と奇妙な相似を見せる。

Ｊ・Ｍ・クッツェー『イエスの少年時代（仮）』鴻巣友季子訳
ノヴァイオレット・ブラワヨ『We Need New Names』谷崎由依訳

ニック・ハーカウェイ『Angelmaker』黒原敏行訳

Ｂ・Ｊ・ノヴァク『One More Thing and Other Stories』山崎まどか訳

ピエール・ルメートル『Au revoir la-haut』平岡敦訳

創立70周年記念企画も進行中！　どうぞお楽しみに！

【群像社】
★今年のイチオシ
オリガ・ホメンコ『ウクライナから愛をこめて』　１２００円
この本の著者あとがきの原稿を受け取った去年の 11 月終わり頃はキエフではすでにかなり混乱が生じていたのですが、当時のヤヌコヴィチ政権は何をするか分からない状態（警察も私兵化していたとか）で、著者から聞いた情報も人前で披瀝しないように気づかっていたほどでした。今年に入ってウクライナをめぐる報道は一挙に拡大、政権は変わったものの、その後のロシアとの政治的衝突はいまも収まったとは言えません。とはいえ、何もすべてのウクライナ人が暴力的な行動に出ているわけではなく、少なくとも最近のキエフは静かだそうです。まさかウクライナがこんなことになるなどとは予想もせずに企画したこの本には、今回のデモも混乱も出てきませんが、キエフ生まれの一人の女性の目を通して見たウクライナの暮らしと歴史が短編小説の題材になるようなエッセイで語られています。それが日々緊迫するウクライナ情勢を落ち着いて見るためにはかえってよかったのか、今年の群像社では一番読まれた本になりました。

マーミン=シビリャーク『オホーニャの眉～ウラル年代記③』（太田正一訳）　１８００円
ウクライナのつぎはウラル。べつにモスクワやペテルブルグに背を向けようというわけではないのですが、中央ばかり見ていてはロシアは分からない、ドストエフスキイの世界にしたってシベリア体験抜きには成立しないのだ、と熱く語る訳者・太田正一の長年の思いがこもった「ウラル年代記」３部作が完結しました。ロシアは「プーチンのロシア」だけではない、あらためてロシアは広いと感じてもらえるでしょう。

★来年の隠し球
大野斉子『シャネルNo.５の謎～帝政ロシアの調香師』　２３００円
ドミートリイ・バーキン『出身国』（秋草俊一郎訳）
ガガ（ゲオルギイ・コヴェンチューク）『８号室』（片山ふえ訳）
ウラジーミル・サンギ『ケヴォング族の嫁取り』（田原佑子訳）
ほか。（新刊以外に、実は需要が多い品切れ本の重版を実現したいと思っています。）

【作品社】

★今年のオススメ
ピーター・マシーセン『黄泉の河にて』(東江一紀訳)
「雄大で暗鬱、贅をそぎ落とした究極の筋立てに、原初の恐怖とたゆみない静寂を隅々まで満たした珠玉の物語たち。われらが最高の書き手による名人芸の逸品だ」―ドン・デリーロ。「背が高くて精悍だったマシーセンにはいくつもの顔があった。アメリカ東部の名門の一族であることから脱走すると、国のエージェントにもなり、編集者としてもはたらき、ナチュラリストとして歩き、冒険家としてとびまわり、僧侶として思考した。いつも、あたりに目をくばっていた。水や砂や風の音に、行き交うひとびとの声に、動物の気配に、自分の恐怖に耳をかたむけていた。マシーセンの十の面が光る、十の周密な短編である」―青山南。半世紀余にわたりアメリカ文学を牽引した作家/ナチュラリストによる、唯一の自選ベスト作品集。

ジョン・ウィリアムズ『ストーナー』(東江一紀訳)
「これはただ、ひとりの男が大学に進んで教師になる物語にすぎない。しかし、これほど魅力にあふれた作品は誰も読んだことがないだろう」―トム・ハンクス。「美しい小説……文学を愛する者にとっては得がたい発見となるだろう」―イアン・マキューアン。「純粋に悲しく、悲しいまでに純粋な小説。再評価に値する作品だ」―ジュリアン・バーンズ。半世紀前に刊行された小説が、いま、世界中に静かな熱狂を巻き起こしている。名翻訳家が命を賭して最期に訳した、"完璧に美しい小説"

*6月と9月に刊行した、2つのアメリカ文学作品。翻訳者の東江一紀氏は、6月21日に62歳の若さで亡くなりました。そして、担当編集者が東江さんに初めてお会いし、この2冊についてのお話をいただいたのは、昨年の12月28日の午後に神保町で。つまり、よんとものイベントの開始前の時間でした。この日、打ち合わせを終え、東江さんはイベントにもお越しくださいました。

★来年の隠し球
*例年は翌年の"メインの一球"というのを挙げるように仰せつかっているのですが、おそろしいことに一昨年末に挙げたものも昨年末に挙げたものも、まだ刊行されておりません。なにかのジンクスのような気がしますので、今年はあえて"この一冊"というのを挙げずにおこうと思います。お許しください。

エドウィージ・ダンティカ『海の光のクレア』(佐川愛子訳)《もうじき》
7歳の誕生日の夜、煌々と輝く満月の中、海辺に建つ漁師の父の小屋から消えた少女クレアは、どこへ行ったのか―。小さな漁村に暮らすさまざまな人びとの視点から、"その一日"を描きだす。全米批評家協会賞などの主要文学賞を次々と受賞し、『愛するものたちへ、別れのとき』が今年「ビッグリード・プログラム」の対象書籍にも選ばれた、全米注目のハイチ系女性作家の最新長篇小説。

クリスティーナ・ベイカー・クライン『孤児列車』(田栗美奈子訳)《もうじき》
1854~1929年のあいだ、アメリカ東海岸の都市から中西部へ養子縁組のために、20万人以上の孤児を乗せて走った実在の「孤児列車」に材を取った小説。この「孤児列車」に乗り、ミネソタで育ったひとりの少女の運命を、今は老境を迎えたその女性自身が、同じような境遇にある現代の不良少女に向けて語る。原書はAmazon.comで11,640件のレビューがついており、うち7,725件が星5つ、3,038件が星4つ(11月18日現在)。

ロバート・クーヴァー『ある夜の映画館』(越川芳明訳)
2012年に『老ピノッキオ、ヴェネツィアに帰る』(作品社)が刊行、今年は名作『ユニヴァーサル野球協会』が白水Uブックスから復刊、探偵小説/フィルム・ノワールをパロディにした二人称小説『ノワール』(作品社)も刊行されて注目が高まるポストモダン文学の雄クーヴァー。本書は、ある一日の映画館の上映プログラムの体裁をとった短篇集。チャップリンや、『オペラ座の怪人』、『カサブランカ』などの名画が、著者一流の諧謔でパロディにされる。

リディア・デイヴィス『サミュエル・ジョンソンが怒っている』(岸本佐知子訳)
『ほとんど記憶のない女』(白水社)に続く短篇集。超短篇から原書で20ページほどのものまで、全56作品収録。最も短いものは表題作「Samuel Johnson is Indignant」と「Certain Knowledge From Herodotus」、「Away From Home」の3作品で、わずか1行。『ほとんど記憶のない女』以前の作品となる短篇集『ブレーク・イット・ダウン』も作品社より岸本佐知子氏の翻訳で刊行予定、唯一の長篇『話の終わり』は弊社より既刊です。

フアン・ガブリエル・バスケス『密告者』(服部綾乃・石川隆介訳)
「『密告者』は、第二次世界大戦直後の数年間を描いた実に力のある物語である。バスケスの想像力の豊かさ、彼の持つ言葉の優美さと鋭敏さ、本書はそれらを見事に証明している」―マリオ・バルガス＝リョサ。ナチの迫害から逃れてきたユダヤ人たちの中南米での運命を重厚に描く長篇小説。本邦初訳。

ル・クレジオ『嵐』(中地義和訳)
2つの中篇を収録した、ノーベル文学賞作家の最新刊。先に収録された「嵐」は韓国領の小さな島ウドが舞台。父親を知らぬ私生児ジューンと、ヴェトナム戦争に記者として従軍した過去を持つフィリップの交流を描く。ふたつめの「身元のない女」は、ガーナに生まれ、パリ南郊のクレムラン・ビセートルに住む少女ラシェルが主人公。ともに、海／旅／探索といった、ル・クレジオらしいテーマが網羅された小説。

エルフリーデ・イェリネク『冬の旅』(林立騎訳)
ヴィルヘルム・ミュラーの詩集と、それをもとにしたシューベルトの歌曲『冬の旅』を下敷きに、ある銀行の株式売買に関する不正事件、10歳から8年半誘拐・監禁された少女の事件という、現実にあった2つの犯罪も参照される。また、教育熱心だった母、ユダヤ系でありながら戦争協力したことでホロコーストを免れ、戦後に精神を病んで亡くなった父との関係、自らの孤独という、自伝的テーマも組み込まれている。オーストリアのノーベル文学賞作家による傑作長篇。

アルノ・ガイガー『サリーのすべて』(渡辺一男訳)
平穏の象徴である我が家の空き巣らによる徹底的な破壊とともに、壊れ始める30年間の夫婦生活。現代オーストリアを代表するベストセラー作家による長篇小説。同著者の作品は、アルツハイマー病の父との交流を綴ったエッセイ『老王の家』(渡辺一男訳、新日本出版社、2013)の既訳があるが、小説は本邦初訳。

アレクサンドル・デュマ『ボルジア家の興亡』(田房直子訳)
チェーザレ、ルクレツィア、そして二人の父・アレッサンドロ六世。権力への欲望に取りつかれ、栄華を極めやがて滅亡へと至ったボルジア家の興亡のすべてを、壮絶に描き出す。フランスを代表する文豪大デュマの長篇小説。既刊『メアリー・スチュアート』(田房直子訳、作品社、2008年)に続く、デュマの「貴族の犯罪」シリーズからの翻訳。

【松籟社】
★今年のイチオシ
ボフミル・フラバル『剃髪式』(阿部賢一訳)
「フラバル・コレクション」。ビール醸造所を舞台にした、ビールが飲みたくなる小説。フラバルらしい語りが堪能できる作品であり、フラバル作品を代表するキャラクターも登場する。イジー・メンツェル監督による映画もおすすめ。

★来年の隠し球　メインの1球

フアン・ガブリエル・バスケス『物体の落下する音』（柳原孝敦訳）11月末予定
＜創造するラテンアメリカ＞
麻薬王パブロ・エスコバルが所有していた動物園から数年前に脱走していた一頭のカバが、射殺された――このニュースを読んだ語り手の脳裏に、凄惨を極めたコロンビア麻薬戦争の記憶が蘇る。母国コロンビアの、正視できぬほど血と暴力が刻印された現代史に、ポスト・ブーム世代を代表する作家が向かい合う。「新しいラテンアメリカ文学で最もオリジナルな声を持つ作家」（バルガス＝リョサ評）による、アルファグアラ賞／国際IMPACダブリン文学賞受賞作。

その他
ミルチャ・カルタレスク『ぼくらが女性を愛する理由』（住谷春也訳）
＜東欧の想像力＞。現代ルーマニアを代表する作家カルタレスクによる女性賛歌。

ナーダシュ・ペーテル『ある一族の物語の終わり』（早稲田みか・築瀬さやか訳）
＜東欧の想像力＞。ユダヤ人の少年が祖父を通して辿る家系の物語と、その終わり。

ボフミル・フラバル『パービテレー』『水底の真珠』
＜フラバル・コレクション＞続刊。

エルビス・ペーテルス『火曜日』（鈴木民子訳）
ベルギーのとある老人が、1960年代に国軍の一員として駐留した植民地コンゴでの暴力の日々を回想する。

ベッペ・フェノーリオ『個人的な問題』（橋本勝雄訳）
カルヴィーノの同時代人フェノーリオによるパルチザン小説。一昨年からリストに載せ続けておりますが、校了しましたので、まもなくお届けいたします。

【藤原編集室】
★今年のイチオシ
ポール・コリンズ『バンヴァードの阿房宮　世界を変えなかった十三人』（山田和子訳）白水社
ミシシッピ川流域の風景を描いた巨大パノラマ画で巨万の富と世界的な名声を得ながら今日まったく忘れられた画家、トンデモ学説の元祖「地球空洞説」の提唱者、驚異の放射線「N線」を発見した物理学者、でまかせの台湾語と奇怪な逸話満載の『台湾誌』でロンドン社交界の寵児となった偽台湾人サルマナザール、幻に終ったニューヨーク空圧式地下鉄計画の推進者などが次々登場。壮大な夢と傑出した才能をもちながら、世界を変えることなく歴史から忘れられた偉人たちの数奇な生涯を紹介したポートレイト集。

A・E・コッパード『郵便局と蛇』（西崎憲訳）ちくま文庫
虎の皮を被ってライオンと戦うはめになった男が見世物の檻の中で出会ったのは……「銀色のサーカス」、母の乳房、心臓の鼓動、鼠捕り、砕かれた両手……精緻で謎めいたイメージが交錯する「アラベスク――鼠」、電信柱と柳の木の奇妙な恋の物語「若く美しい柳」など、日常の裏側にひそむ神秘と怪奇、啓示と奇蹟を詩情ゆたかに描く孤高の作家コッパードの珠玉の短篇集。

★来年の隠し球
◇国書刊行会
レオ・ペルッツ『スウェーデンの騎士』（垂野創一郎訳）　3月予定
1701年冬、シレジアの雪原を行く二人の男。軍を脱走してスウェーデン王の許へ急ぐ青年貴族と、逃亡中の泥

坊〈鶏攫い〉は、追手をまくため身分を交換し、それぞれの道へ。数年後、貴族の許婚の屋敷に「スウェーデンの騎士」が現れるが……。悪禍男爵、煉獄帰りの粉屋、盗賊団の面々と個性豊かな脇役たちが物語を彩り、波瀾万丈の冒険が展開されるピカレスク伝奇ロマン。

レオ・ペルッツ『聖ペテロの雪』(垂野創一郎訳)
病院で目覚めたアムベルクに、「あなたは5週間前に交通事故にあい、この病院に担ぎこまれた」と医師は言った。しかし、彼の記憶は違っていた。6日前、内科医である彼はある小村に到着し、フォン・マルヒン男爵の娘を診察していた……。失われた5日間、彼は何を見、何をしていたのか。そして男爵の秘かな野望とは。謎が謎を呼ぶペルッツ現代物の最高傑作。

◇ちくま文庫
アンナ・カヴァン『氷』(山田和子訳) 3月予定
地球規模の異常気象により、氷が全世界を覆いつくそうとしていた。姿を消した少女を追って某国に潜入した私は絶対的権力を振るう〈長官〉と対峙するが……。恐ろしくも美しい世界終末のヴィジョンで読者を魅了し、冷たい熱狂を引き起したアンナ・カヴァンの伝説的名作、待望の復刊。クリストファー・プリーストの新序文付き。

◇白水Uブックス/海外小説 永遠の本棚
イーヴリン・ウォー『ピンフォールドの試練』(吉田健一訳) 1月刊
転地療養の船旅に出た作家ピンフォールドは、乗船早々、どこからともなく聞こえてくる騒々しい音楽や怪しい会話に悩まされる。声はやがて作家の悪口となり、さらには攻撃計画も……。姿なき敵に翻弄される小説家の苦闘を皮肉なユーモアをまじえて描くウォー晩年の傑作。

アルフレート・クビーン『裏面』(吉村博次・土肥美夫訳) 3月刊
大富豪パテラが中央アジアに建設した〈夢の国〉に招かれた画家夫婦は、そこで古い建物から成る都に住む奇妙な人々と出会う。やがて街を眠り病が襲い、動物たちは野性化、住民は破壊と肉の欲望に取り憑かれ始める。幻想画家クビーンが残した唯一の小説。挿絵多数。

ホレス・マッコイ『彼らは廃馬を撃つ』(常盤新平訳)
大恐慌時代のハリウッド。食いつめた若い男女が賞金目当てにマラソン・ダンス大会に参加する。最後の一組が残るまでひたすら踊り続ける過酷な競技が八百時間を越え、残りが二十組に絞られたとき……。不況時代の若者たちの虚無感を巧みな構成で描いたアメリカ小説の傑作。

サキ『クローヴィス物語』(仮題) (和爾桃子訳)　＊新訳
皮肉屋で悪戯好き、舌先三寸で周囲を振りまわす青年クローヴィスが起こす騒動、また聞き手として引き出す物語の数々。辛辣な諷刺と残酷なユーモアに満ちた「短篇の名手」サキの代表的短篇集、初の完訳。序文A・A・ミルン。

レオ・ペルッツ『第三の魔弾』(前川道介訳)
16世紀、メキシコ。神聖ローマ帝国を追放され新大陸に渡ったグルムバッハ伯爵は、アステカのモンテスマ王に味方し、コルテス率いるスペイン軍と戦う。グルムバッハは悪魔の力を借りて百発百中の銃を手に入れるが……。騙し絵のように反転し変幻する物語を、巧みなストーリーテリングで描き切った幻想歴史小説。

◇創元推理文庫
ヘレン・マクロイ『歌うダイアモンド』(好野理恵訳) 2月予定

清朝末の北京で起きたロシア公使夫人失踪事件の謎を解き明かす名作「東洋趣味（シノワズリ）」、女教師の分身が奇怪な事件を召喚する「鏡もて見るごとく」、核戦争による“最後の日”を淡々と描いて深い感動を呼ぶ「風のない場所」ほか、異色ミステリと文明批評に貫かれたSF作品を収録。

【集英社】
★今年のイチオシ
『ロボコン　イケてないボクらのイカした特別授業』
ニール・バスコム／著　　松本剛史／訳　　［日本語版監修］松井龍哉
申し訳ありません、ノンフィクションです。でも、小説のようにドラマチックな一冊です。アメリカ最大のロボットコンテストを目指す高校生と、彼らを指導する熱血教師の姿を描いています。言い争ったり、サボったり……とはじめはバラバラだった高校生らが、様々な壁を一緒に乗り越えていくうちに、次第に一つにまとまり、ラストには胸が熱〜くなるドラマが待っています。「一生懸命になるのって、カッコ悪いことじゃない」って思わせてくれます。忘れていた感覚を思い起こさせてくれます。さらには、“ロボット作り”という、ちょっとオタクな世界を身近に、とても愛すべきものとして感じさせてくれます。新たな世界が開ける作品です。　※リリースを添付します。ご参照ください。

★来年の隠し球　現在、すべて文庫での刊行を予定しています。
『凍える墓』　2015年1月20日発売
ハンナ・ケント／著　　加藤洋子／訳
19世紀、アイスランド最後の女性死刑囚の実話をもとに描いた小説。オーストラリア出身の新人女性作家の作品ですが、発売と同時にイギリスで大きな話題と呼んで、ベイリーズ・ウィメンズ・プライズやガーディアン新人賞などの最終候補作に残りました。また本国オーストラリアでも、ＡＢＩＡ年間最優秀小説賞、ＢＡニールセン・ブックデータ・ブックセラーズ・チョイス賞を受賞。このほか数々の文学賞を受賞、あるいはノミネートと注目を集めています。いち早く、ジェニファー・ローレンス主演、ゲイリー・ロス監督での映画化も決定。今後、さらに話題となる作品だと思います。
死刑囚アグネス・マグノスドウティル。彼女はなぜ、愛する男を殺してしまったのか？
死刑執行までの間を、行政官を務める男の農園で過ごすことになった彼女が、無骨だが真摯な家族との時間の中で、徐々に心を開いて自らの生き様を語り始め……。
ラストは涙無しには読めません。

『ゲルマニア』2015年6月19日発売予定
ハロルト・ギルバース／著　　酒寄進一／訳
ドイツ作品。WWⅡナチス下のドイツ。連続殺人事件の捜査のため、ナチス将校とユダヤ人刑事が協力し合わなくてはいけなくなります。協力を拒めば死、でも事件が解決したら用無しとして捕らわれる立場のユダヤ人刑事。そんな出だしからの大きな葛藤を抱えつつ、事件の捜査に奔走。やがてナチス将校とユダヤ人刑事との間に、何とも言えない絆が築かれていきます。
ミステリーとしての読み方は勿論ですが、緊迫した時代背景の中、二人の男が徐々に互いを認め合い、つながっていく様子が、人間ドラマとして大きな読み応えを感じさせてくれる作品です。

＜THE POCKET MASTERPIECES＞　2015年9月18日より毎月刊行予定
世界の文学をこれまでになかった切り口で贈る“文学全集”。大きな声では言えないがじつはまだ読んでいない人、改めて読みたい人、これから読む人（学生など）……と幅広い読者にもっと気軽に楽しく世界文学に触れてもらいたく、力を入れて刊行するシリーズです。
＜概要＞

◆編集員……大宮勘一郎、鴻巣友季子、桜庭一樹、柴田元幸、辻原登、沼野充義、野崎歓、野谷文昭
◆18 世紀末～20 世紀初頭の世界的文豪の精髄をコンパクトに集約した入門書
◆当該分野第一人者による斬新な編集
◆小説実作者による長篇のダイジェスト・翻案・翻訳
◆埋もれた名作の新訳
◆最新の研究動向を踏まえた略伝と文献案内

2015 年 9 月 18 日より毎月 1 巻刊行予定。9 月のみ 2 巻刊行予定。全 13 巻予定。
9 月刊
多和田葉子編『カフカ集』……多和田葉子氏が訳される作品もあり。
桜庭一樹／鴻巣友季子編『E．A．ポオ集』……桜庭氏、鴻巣氏の訳もあり。
このほか、刊行月は調整中ですが、毎月順次刊行（順不同）
野崎歓編『バルザック集』
加賀乙彦編『トルストイ集』
辻原登編『ディケンズ集』
柴田元幸編『マーク・トウェイン集』
堀江敏幸『フローベール集』
大宮勘一郎編『ゲーテ集』
辻原登編『スティーヴンソン集』
桜庭一樹編『ブロンテ姉妹集』
沼野充義編『ドストエフスキー集』
鴻巣友季子編『ルイス・キャロル集』
野谷文昭編『セルバンテス集』

<2015 年・このほかお楽しみいただきたいラインアップ>
『渚の忘れ物　犯罪報道記者ジムの事件簿』2015 年 2 月 20 日発売予定
コリン・コッタリル／著　　中井京子／訳
CWA（英国推理作家協会）賞ノミネート。タイのリゾートを舞台に、失業中の 30 代女性記者ジムが活躍するミステリー。一見、軽いユーモア・ミステリーに感じられますが、じつはタイが抱えるさまざまな問題に鋭い焦点を当てた社会派作品。“微笑の国”の別の姿（真の姿）が見えてきます。

『ミー・ビフォー・ユー』　2015 年 2 月 20 日発売予定
ジョジョ・モイーズ／著　　最所篤子／訳
アメリカやイギリスで大ヒット。映画化も予定。「尊厳死」という重いテーマを扱いながらも、軽いタッチで読ませます。

『水の波紋（仮）』　2015 年 3 月 20 日発売予定
エルヴェ・コメール／著　　山口羊子／訳
フランス作品。ひとりの子どもの何気ない行いが、波紋が広がるようにじわじわと人々の歯車を狂わせていく……。

『復讐する海』　2015 年 4 月 20 日発売予定
ナサニエル・フィルビリック／著　相原真理子／訳
2003 年に単行本で出した作品を、映画化にともない文庫化。ノンフィクションですが、やりきれないヒューマンドラマがあります。遭難した船の乗組員が、生存のため、先に死んでいった仲間を食べてしまう話。

『フェイス・オフ（仮）』2015年秋くらい
ディヴィッド・バルダッチ編　　田口俊樹／訳
アメリカの人気推理作家が二人一組で共作した短編のアンソロジー。ジェフリー・ディーヴァーやマイクル・コナリーなど名だたるラインアップ。お互いが持つ人気キャラクターの競演にもなっていて、海外ミステリー・ファンには宝箱のような一冊。

【新潮社】
★今年のイチオシ
トマス・ピンチョン『重力の虹』の佐藤良明さんによる記念碑的新訳、構想16年を経て刊行されたジュンパ・ラヒリの傑作長篇『低地』　（小川高義訳）、そして番外篇として、都甲幸治さんの愛と共感にあふれた同時代文学ガイド『生き延びるための世界文学』を、自信を持っておすすめします。

★来年の隠し玉　メインの一球
ミランダ・ジュライ『It Chooses You』（仮）岸本佐知子訳　来夏いよいよ刊行予定
映画監督でもある人気作家による異色のノンフィクション。個人売買を仲介するフリーペーパー『ペニーセイバー』に広告を出す人々を、映画の脚本執筆に行き詰まった著者が訪ねてインタビューする。カラー写真も多数収録する本ですが、クレストシリーズから刊行の予定です。

＜来年の自信作、まだまだあります＞
カルミネ・アバーテ『風の丘』関口英子訳　1月刊行予定
イタリア半島最南端、カラブリア地方に暮らす一族の、二十世紀初頭から現代にわたる四代の物語。カンピエッロ賞受賞作。

エトガル・ケレット『突然ノックの音が』母袋夏生訳　2月刊行予定
今年の東京国際文芸フェスでも人気を集めたイスラエル作家の、笑いと切なさと寓意に満ちた38篇を収める最新短篇集。フランク・オコナー賞最終候補作。

ハンス・ヨアヒム＝シェートリヒ『陛下、急いでおります』（仮）松永美穂訳　3月刊行予定
啓蒙思想家ヴォルテールと、プロイセン王フリードリヒ2世。歴史的偉人たちの素顔をいきいきとユーモラスに描きなおす中篇歴史小説。

リチャード・パワーズ『オルフェオ』（仮）木原善彦訳　春刊行予定
微生物による作曲を試みる現代芸術家が、テロ容疑で逮捕された――。実在の事件をヒントに、安全と監視に翻弄される現代社会を描く傑作長編。

ダニエル・アラルコン『夜、僕らは輪になって歩く』（仮）藤井光訳
反政府的な政治劇を上演したとして投獄された男が、十数年ぶりに劇団を再結成するが――。『ロスト・シティ・レディオ』の著者による最新作。

リュドミラ・ウリツカヤ『49年の子供時代』（仮）沼野恭子訳
中庭のあるアパートに住んでいる子供たち。彼らが出会った奇跡のひとつひとつを、感動的にあざやかにほのぼのと描く物語集。ウラジーミル・リュバーロフの絵とともに贈る、大人のための絵本。

ジュリアン・バーンズ『人生のレベル』（仮）土屋政雄訳
気球に魅せられた写真家、女優と恋に落ちた軍人、そして突然最愛の妻を亡くした作家。ブッカー賞作家の痛切な最新作。

【東京創元社】
★今年のイチオシ
『ペナンブラ氏の24時間書店』
ロビン・スローン　島村浩子訳（四六判並製）
失業中の青年クレイが再就職した〈ミスター・ペナンブラの二十四時間書店〉は変わった店だった。まったく繁盛していないのに店名どおり24時間営業で、梯子付きの高い高い棚には、存在しないはずの本（Google検索にもひっかからない！）がぎっしり詰まっているのだ。暗号で書かれているらしいそれらの本の解読に、クレイは友人たちの力を借りて挑むが、それは500年越しの謎を解き明かす旅の始まりだった―すべての本好きに贈る冒険と友情、その他もろもろ盛りだくさんの物語。
＊2013年度全米図書館協会アレックス賞受賞
＊「全国大学ビブリオバトル2014―京都決戦―」グランドチャンプ本

『霧に橋を架ける』
キジ・ジョンスン　三角和代訳（創元海外ＳＦ叢書）
腐食性の危険な“霧”の大河に初めての橋を架けようとする男と渡し守の女の絆を描いてヒューゴー賞・ネビュラ賞を受賞した表題作をはじめ、この不思議に満ちた世界における“他者とのコミュニケーション”のさまざまなあり方を精妙に描き切る、異才の女性作家による幻想短編集。

『旋舞の千年都市　上下』
イアン・マクドナルド　下楠昌哉訳（創元海外ＳＦ叢書）
犠牲者ゼロの奇妙な自爆テロがすべての始まりだった!?　近未来のイスタンブールを舞台に、環境も目的もまるで異なる６人の主人公たちが繰り広げる大騒動。過去と未来、西洋と東洋、科学と神秘が渾然と融けあう現代的都市の重層的な姿を描く、キャンベル記念賞・英国ＳＦ協会賞受賞作。

『月の部屋で会いましょう』
レイ・ヴクサヴィッチ　岸本佐知子／市田泉訳（創元海外ＳＦ叢書）
恋人の手編みセーターの中で迷子になる男？　皮膚が宇宙服になって飛んでいってしまう病？　誰もが金魚鉢を抱えていなければならない星への休暇旅行？　とびきり奇妙だけれど優しく切ない、ちょっぴり恐い３３編の奇談集。2001年度フィリップ・Ｋ・ディック賞受賞作。

『図書室の魔法　上下』
ジョー・ウォルトン　茂木健訳（創元ＳＦ文庫）
邪悪な母親から逃れた少女モリは、親族の意向で女子寄宿学校に入れられてしまう。周囲になじめないモリは大好きなＳＦと、自分だけが知る魔法の秘密を支えに生きてゆこうとする。1970年代末の英国を舞台に、読書好きの繊細な少女が綴る青春の日々。ヒューゴー賞・ネビュラ賞・英国幻想文学大賞受賞作。

『愛の裏側は闇（全三巻）』
ラフィク・シャミ　酒寄進一訳（四六判上製）
「ねえ、ぼくたちの恋は本当にうまくいくと思う？」1960年春、シリア。ムシュターク家のファリードとシャヒーン家のラナーは、一族の者に隠れて逢瀬を続けていた。十二歳で出会ってすぐ、恋に落ちたふたり。しかし両家は、何十年ものあいだ血で血を洗う争いを続ける仇敵同士だったのだ。一方、1969年のダマスカスで首の骨を折られた男の死体が発見される。殺害されたのは秘密警察官で、胸ポケットには謎めいた文章が書かれた灰白色の紙が残されていた。ふたつの物語の断片に、一族の来歴、語り部による哀話や復讐譚を加えて構成された全304章は、百年にわたるシリアの人々・風土・文化が埋め込まれた絢爛たるモザイク画となる。今世紀最大級の世界文学！

『探偵ブロディの事件ファイル』
ケイト・アトキンソン　青木純子訳（四六判仮フランス装）
フランスに住むことを夢見る、バツイチ探偵ブロディ。中年の変人姉妹に依頼された34年前に消えた当時３歳の妹捜し（死んだ父親の家を片付けたら、妹とともに消えたぬいぐるみが出てきたんです！）、猫屋敷からいなくなった（誰かがさらっていったんです）黒猫捜し、さえない男の妻の浮気調査（あいつがあんなにゴージャスな女をものにできたなんて！）等々。『世界が終わるわけではなく』のアトキンソンがミステリを書いたのです。

★来年の隠し球
『アルタイ』
ウー・ミン　さとうななこ訳（四六判丸背仮フランス装）
ヴェネツィア共和国で国営造船所が爆発、炎上。陰謀の影は無かったが、共和国は生け贄を欲していた。身分があり、重要な任務につき、致命的な秘密をかかえる者。ユダヤ人であることを隠して活動する諜報部員エマヌエーレこそ完璧な容疑者。逃亡者となった彼を保護したのは、ヴェネツィアの宿敵オスマン帝国のスルタンに仕えるユダヤ人だった……。16世紀の地中海世界を舞台に、見果てぬ夢を追う男たちの姿を壮大なスケールで描いた傑作。話題をさらった『Q』に続き〈ルーサー・ブリセット プロジェクト〉のメンバーが別名義で送る、歴史エンターテインメント巨編。

『エディにさよならするために（仮）』
エドゥワール・ルイ　高橋啓訳（海外文学セレクション）
ひどい貧困の中で育ったエディ。彼は早いうちから〈性同一性障害〉である自分に気づく。現在の超エリートの姿からは考えられないほどの悲惨な生活と壮絶ないじめ、暴力……。自らの少年期を赤裸々に告白した私小説であり、ビルドゥングス・ロマン。きわめて今日的なテーマを、きわめて突き放した、たんたんとした調子で描き、それでいて、変に文学臭をまとわせず、むき出しの人間の姿を見事に描き上げた問題作。
フランス国内で２か月半ではやくも１５万部。アニー・エルノー絶賛。
1992年10月、フランス、ソンム県の貧困家庭の生まれ。現在、21歳で、高等師範学校（エコール・ノルマル・シュペリユール）の学生で哲学と社会学を学ぶ。本作は小説第一作だが、この前に「ピエール・ブルデュー論」がすでに刊行されている。

『プラハの墓地（仮）』
ウンベルト・エーコ　　橋本勝雄訳（海外文学セレクション）
現在、歴史研究の上では「偽書」とされる「シオン賢者の議定書」はナチスに多大な影響を与え、ホロコーストを引き起こすもととなったとも言われている。この文書を書いた男、シモーネ・シモニーニの回想録という形をとった小説。
冷酷な主人公シモニーニ以外の登場人物はほとんどが、歴史上の実在の人物。19世紀ヨーロッパを舞台に繰り

広げられる歴史大陰謀小説。
ユダヤ人嫌いの祖父の影響を受けて育ったシモーニは祖父の死後、公証人の見習いとなりり、師が手を染めていた文書偽造術も習得する。その技術の高さから、秘密警察とのつながりが出来、様々なスパイ行為を請け負うことになり……。プラハの墓地というのは、プラハには欧州最大のユダヤ人ゲットーがあったために今なお荒れたまま残るユダヤ人墓地がある、その墓地のことである。

『執着（仮）』
ハビエル・マリアス　白川貴子訳（海外文学セレクション）
マリア・ドルスという30代の女性編集者が、毎朝カフェで見かける仲睦まじい夫婦。理想のカップルとして彼女は憧れに似た気持ちを抱いていた。がある日、カップルは姿を消す。なぜ？　なんと夫のほうが、ホームレスにメッタ刺しにされて死亡したというのだ。何か月か後、未亡人をカフェで見かけたマリアは、彼女に声をかけ、友人となる。夫妻も彼女に好意を抱いていたのだという。そして、夫の親友だったという男を紹介される。その男と、未亡人は特別な関係になっていく。そしてマリアも男に惹かれ関係をもつように……。そして、ある日、その男の部屋で朝を迎えたマリアは、彼と訪ねてきた客の男の驚くべき会話を耳にした！　あの事件は通り魔殺人ではなかったのか？　三角関係の精算……？　それとも嘱託殺人だったのか？　愛とは？　人間とは？　ミステリ仕立ての「愛をめぐる考察」
作中『マクベス』『シャベール大佐』等々多くの文学作品が引かれ、読者を知的妄想に引き寄せる。

『みんなバーに帰る』
パトリック・デウィット　茂木健訳（四六判仮フランス装）
『シスターズ・ブラザーズ』が、ブッカー賞候補作ながら『このミステリーがすごい！』の第四位にランクインした（トップ１０では唯一の新人）、パトリック・デウィットのデビュー作。舞台はハリウッドの外れにあるバーで、語り手はそのバーテン。一癖二癖あるどころではない客たちの悲惨な酔態が、悪夢のなかを漂っているような感覚で生々しく描き出されます。登場人物が全員泥酔しているという超・異色作。ドライなユーモアが全編を貫いているのは『シスターズ・ブラザーズ』と同様ですが、『シスターズ・ブラザーズ』がやわらかく思えるほどに、こちらの作品の方がより過激で冷酷です。

『ダンデライオン・クロック（仮）』
ガイ・バート　山田蘭訳（四六判並製予定）
個展開催を前に、故郷イタリアの小さな村に戻ってきた中年画家のアレックスは、絵を描きながら過去の出来事を回想する。夢見がちな少年時代のある夏の日、彼は初めての理解者である親友ジェイミーと、その従姉アンナとともに、廃墟となった教会で血まみれの男を発見した。狙撃銃を携え、足に重傷を負っていたその男を、アンナの提案により大人達から匿うことになったアレックスたちだが……。『ソフィー』『体験のあと』で知られる早熟の天才の到達点とも言うべき、追憶と郷愁、悔恨が織りなす大長編。

『禁忌』
フェルディナント・フォン・シーラッハ　酒寄進一訳（四六判上製）
『犯罪』『コリーニ事件』を超える衝撃！
ドイツ名家の御曹司ゼバスティアンは、文字のひとつひとつに色を感じる共感覚の持ち主だった。ベルリンにアトリエを構え写真家として大成功をおさめるが、ある日、若い女性を誘拐したとして緊急逮捕されてしまう。捜査官に強要され殺害を自供し、殺人容疑で起訴されたゼバスティアンを弁護するため、敏腕弁護士ビーグラーが法廷に立つ。はたして、彼は有罪か無罪か―。刑事事件専門の弁護士として活躍する著者が暴きだした、芸術と人間の本質、そして法律の陥穽。2012年本屋大賞翻訳小説部門第１位『犯罪』の著者が「罪とはなにか」を問いかけた新たなる傑作。著者による日本版オリジナルエッセイ「日本の読者のみなさんへ」を収録。訳者あとがき＝酒寄進一

The Book of Lost Things
ジョン・コノリー　田内志文訳（四六判並製予定）
孤独を抱える少年が飛び込んでいった、残酷で美しい「本のなかの世界」と、そこで出会った童話の登場人物たち。英米で65万部突破、全米図書館協会アレックス賞受賞作！
第二次大戦下のロンドン。本を愛する12歳の少年デイヴィッドは、物語を読む楽しさを教えてくれた母親を、病気で失ってしまう。父は再婚し、一家は田舎の古い屋敷に引っ越してゆく。継母になじめず孤立してしまうデイヴィッドは、いつしか本のささやき声を聞いたり、ふしぎな国の幻を見るようになってゆく。そんなある日、屋敷の庭を囲む壁の隙間から、「壁を抜けてきて」という母親の声が聞こえる。そのとき、ドイツ軍の爆撃機が上空に姿を現し、デイビッドは逃げ場を求めて壁の隙間へと飛び込んでいく。
異世界で待っていたのは、『赤ずきん』に登場した〈木こり〉だった。彼の案内のもと、デイヴィッドは元の世界に帰るべく、この国の王が持つ『失われしものたちの書』を探す旅に出る。狼と子供をつくったふしだらな〈赤ずきん〉と彼女が産んだ人狼、魔女に殺されてしまう〈グレーテル〉、継母に嫉妬され心臓を食べられてしまう〈白雪姫〉など、童話の登場人物たちとの出会いを繰り返しながら、残酷で美しい世界を旅していくが……。王道のおとぎ話のなかに少年の苦しみや哀しみが童話の登場人物たちとして具現化され織り込まれている、完成度の高いダーク・ファンタジイ。

Tunneling to the Center of the Earth
ケヴィン・ウィルソン　芹澤恵訳（四六判並製予定）※2015年春頃刊行
地球の中心に向かってトンネルを掘る「ぼくら」の夏、代理家族派遣会社に「祖母」として勤める女性の回想、おばあちゃんの遺産をめぐる一族総出の奇妙なゲーム、サーカス一座の「不死身の男」の秘密を知った青年の決断……少しだけ「普通」から逸脱した日々を送る人々の、生活と感情の断片を切り取った11の物語。シャーリイ・ジャクスン賞受賞作。

他に、ケイト・アトキンソンの探偵ブロディのシリーズ第二弾も。アトキンソンならではの人間臭いミステリふたたびです。

【みすず書房】
★今年のイチオシ
パトリック・ドゥヴィル『ペスト&コレラ』辻由美訳（5月刊）
ペスト菌の発見者イェルサンの奇天烈な人生を断章によって痛快な物語に。「かつて、ポスト・モダンの旗手として鳴らした著者ドゥヴィルの、軽やかに時空を行きかい、歴史と対話する文体もまた、冒険家の足取りを思わせる」（野崎歓氏）「この特異な人物を、彼が生きた激動の時代のるつぼへ投げ入れ、ユニークな仕掛けで小説に仕立て直した」（松山巌氏）。

ブルース・チャトウィン『黒ヶ丘の上で』栩木伸明訳（9月刊）
英国ウェールズ地方に生まれた双子兄弟の世界から孤絶した人生をたどりつつ、戦争や技術革新の一世紀を物語る、チャトウィン唯一の長編小説。「飛び石づたいに再生される他者の過去をそっくり自分のものにしてしまうチャトウィンの手品を味わいたい」（堀江敏幸氏）「冒険旅行と骨董趣味に引き裂かれたチャトウィンの関心を反映した芳醇な小説世界」（尾崎真理子氏）。

フレッド・ウェイツキン『ボビー・フィッシャーを探して』若島正訳（9月刊）
実在の天才少年の成長を軸に、チェスに魅せられた人々の静かに燃える魂を描きだす傑作ノンフィクション。「震える思いで読み続けた……これから先も何度でも読み返すだろう一冊になった」（大崎善生氏）「手に汗に

ぎる熱戦のもようは、チェスを知らずに読んでも十分面白く刺激的だ」（佐久間文子氏）。
※本書のPR用特設ウェブサイト［http://bobby.msz.co.jp］では、訳者の若島先生と将棋の羽生善治名人の対談（全文！）を含む『ボビー・フィッシャーを探して』刊行記念イベントの詳細レポートや、チェス・将棋をはじめとするボードゲームが絡んだ小説&ノンフィクションのお勧めリスト（若島先生の選・評）をご覧いただけます。

ハンス・ファラダ『ベルリンに一人死す』赤根洋子訳（11月刊）
狂気と恐怖に凍りつくナチスの街で、たった一人の反乱が始まる。戦争直後に書き上げられてから60年以上を経て、いま世界を震撼させているリアリズム小説の傑作。「コンラッドの恐怖、ドストエフスキーの狂気、カポーティ『冷血』のぞくっとする感じ」（『ニューヨーク・タイムズ』紙）

ところで、ガイブンからはジャンル的にかけ離れていますが
トマ・ピケティ『21世紀の資本』山形浩生ほか訳（12月刊）
が、刊行日から現時点まで、みすず書房のほかの刊行書とくらべておよそ1000倍の速度（単位：円/s）で売れております。書店で見かけたら冷やかしにでもご覧になってみてください。

★来年の隠し球
ブルース・チャトウィン『ウイダーの副王』旦敬介訳（前半予定）
南米から西アフリカに渡った奴隷商人の家系。今もつづく驚くべき世界をチャトウィンが華麗に描いた逸品は、ヘルツォーク監督の怪作『コブラ・ベルデ』の原作でもある。大西洋両岸の作品舞台を悉知する旅人・旦敬介が腕をふるった新訳で、日本再上陸。

バーバラ・ピム『幸せのグラス』芦津かおり訳（前半予定）
定年退職小説『秋の四重奏』で読者の心をつかみ、おひとりさま小説『よくできた女』で女性読者を増やした英国の知る人ぞ知る女流バーバラ・ピム。こんどはセレブなマダムの恋愛模様を、いつものシニカルで愛情あふれる筆致で活写する。

アレックス、ロス『これを聴け』柿沼敏江訳（夏ごろ予定）
『21世紀を語る音楽』の気鋭音楽評論家、待望のエッセイ集。クラシックという気取ったステレオタイプを嫌い、世界を知る方法として音楽にアプローチする。クラシックもポップも広く、熱く、ディープに聴くために、まず「これを読め！」

ジョーディー・グレッグ『ルシアン・フロイドとの朝食』小山太一ほか訳（後半予定）
ジャーナリストの著者グレッグはフロイド晩年の10年間、友人サークルのメンバーとして画家と朝食を共にした。精神分析家フロイトの孫、馬フェチ、子ども14人、所在不明…インタビューを通しこの巨大でエキセントリックな画家の素顔を探る伝記。